母親の自閉症傾向と子どもへの愛着との関連
ー子どもの健康と環境に関する全国調査ー

廣川空美

母親の性格特性によって子どもへの接し方が異なり、子どもとの愛着形成に影響があると考えられる。出生後の早い段階での母親と子どもとの愛着形成は、その後の子どもの発達にも影響するといわれている。

本研究では、エコチル調査で得られたデータから、87,396 名の母親を対象に、①性格特性として自閉症傾向に注目し、産後 1 か月時の子どもへの愛着との関連を検証した。母親に産後うつの症状がある場合、子どもへの愛着が育まれにくいという先行研究を踏まえ、②母親の産後うつ傾向の有無別に分析した。その結果を専門誌（Journal of Affective Disorders 243 巻, p485-493, 2019 年）に発表した。

<u>母親の自閉症傾向の得点が高くなるほど産後うつ傾向のリスクが高く、子どもへの愛着も形成されにくい</u>

自閉症傾向は AQ-J-10（the Japanese version of Autism Spectrum Quotient: 自閉症スペクトラム指数 10 項目短縮版）に基づき、「社会的スキルのなさ」、「コミュニケーション力のなさ」、「注意の切り替えが困難」、「想像力のなさ」の 5 つの構成要素を含む。子どもへの愛着は、MIBS（the Mother to Infant Bonding Scale: 赤ちゃんへの気持ち質問票）のうち、「いとおしいと思えない」、「どうしてよいかわからない」、「特別な気持ちがわかない」、「この子の世話を楽しめない」、「この子がいなかったらいいのになあ」の 5 項目を用いた。各項目について 0～3 点で得点化し（合計 15 点）、得点が高いほど子どもへの愛着が低いことを意味する。合計得点 1 点以上を子どもへ愛着が低いとして、分析した。

その結果、母親の自閉症傾向の得点が高いほど産後うつ傾向のリスクが高く、子どもへの愛着も形成されにくいことが示された（図1）。

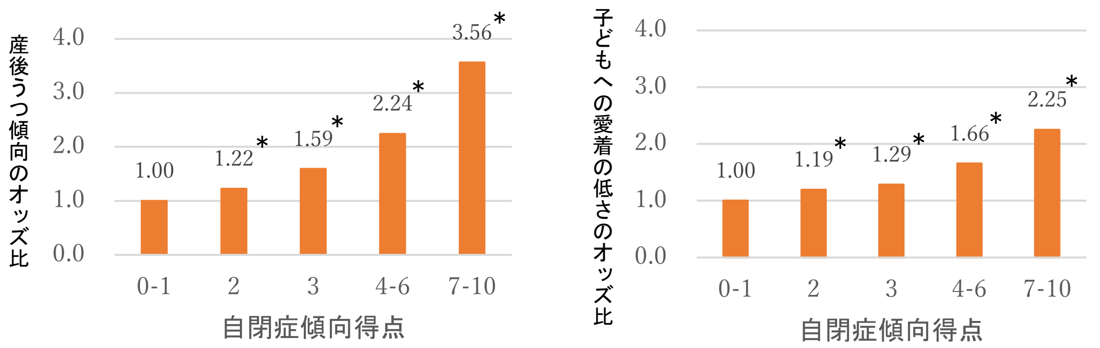

図1. 母親の自閉症傾向得点と産後うつ傾向（左）、子どもへの愛着の低さ（右）との関連

また、子どもへの愛着の項目のうち、「いとおしいと思えない」、「特別な気持ちがわかない」について、2 点以上を「該当あり」として、そのオッズ比を算出した場合、特に、産後うつ傾向のある母親で、「想像力のなさ」の得点が高いグループでこれらのオッズ比が高くなる傾向があった（図2）。

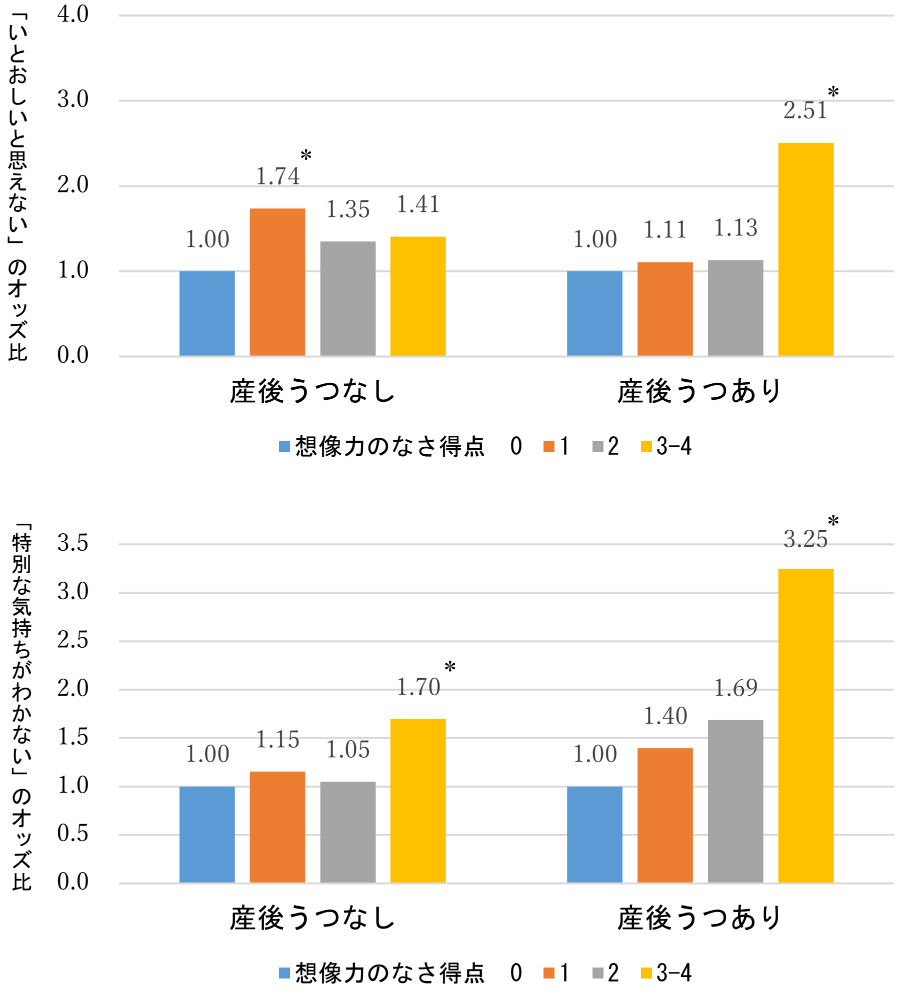

図2. 産後うつ傾向の有無別の「想像力のなさ」と「いとおしいと思えない」、「特別な気持ちがわかない」との関連

自閉症傾向のある母親には、家族や友人による周囲の理解と、自治体や公的機関による早期からの育児サポートが必要だと考えられる。